

## ドン・ジュアンに観るバイロン像 (13)

楠 本 哲 夫

The paradoxes\* of Heroism

\* 一見、矛盾又は不合理のようで、実際は正しい  
説。逆説、奇説。つじつまの合わぬ言語。

Longinus の筆になったものだと、されている “On the sublime” の現存する断章（未完の遺稿）の終り頃に、英雄詩の創作に必要な社会的環境についての議論がのべてある。

“ある哲学者” は Longinus の指示した —— 文学的力（修辞学的 及び詩的 両方での）の、当代衰微の理由は デモクラシー衰微の中に見出されることができる。したがって、個人の自由の衰微の中に見出されることができる —— と。

“Sublime（荘嚴）は 偉大な魂のエコーである” という Longinus の教は、環境、事情によって犯される “そして、もはや、おこらない” と この哲学者は 述べていて、ほんとうに けだかい そして卓絶した性格、もし全面的に例外的でないなら……。

というのは 自由は —— そう、いはれているが —— 高潔な精神の持主の想像を養い、希望を鼓吹する power 力 をもつ、そして、それが滲透するところでは、互の敵意、競争意識への熱望と そして、一流の場所を熱望する追求心が広まりゆく……。

今日 我々は、少年時代、ほとんど その慣習、そして その遵守の中に包

まれて、正しい苦役という教訓を学んでいるように思へるが、そのとき我々の思想はまだ未熟で感じ易く、雄弁の最も美しい、最も創造的源を味っていない（この eloquence とは、freedom 自由 の意味なんだが）それ故、我々は、まさに莊嚴な おべっか使いに変装して 現れるのである。

Longinus は、この哲学者に それとなく答えて より詳細な理由を述べた。

もし 文学的な崇高さが 自由の後退と共に衰微するものならば、自由の消失は 次の点に その根源をたどりゆかねばならぬ、即ち、軍隊で同居する如く 我々の現代を占據し、踏みにじり、略奪する、あの激しい感情に、たどり行かねばならぬ、というのは、金銭欲（この疾病から 我々は皆、今、ひどく苦しんでいるが）そして快樂への欲望が、我々をして、それらのとりこ（奴隷）としてしまい、いやむしろ —— こういってもよいだろうが —— 我々をして 心身共に 深みで 溺らせ、且つ、富への欲望が 人間をけちに、ちっぽけに、する疾病であり、快樂への欲望が 人間を 最も卑しくする疾病であるのだから。このことは 必然的に起るもので 人間は 最早や、自らの両眼を高く上げることをしてないだろうし、あるいは、なんら、名声への、より進んだ考へをもたなくなるだろう、だが、しかし、そのような生活破壊は徐々に その完成な消耗へと達し、そして魂の崇高は あせゆき、なへゆき、そして 輕蔑すべきものとなりゆくであろう。

事実 Byron の主な詩のすべてが Longinus 的伝統（この文が 我々のために 協調してくれる）の一部として かかれている。

このように言うのが常識だろうが —— Byron 作品が 到るところで 自由の精神を高揚し 且つ その弾劾か、暴露か、自由喪失の分析か、又は、自由、そして、自由を所有することの必要の議論 のいずれかの点で、そのエネルギーの多くを使い果たしている。

さらに、Byron 作品から 敵意をもつ、あるいは、共鳴的批評家にか、いずれの場合も等しく、すべての演繹（推論）がなされるとき —— つまり、

Byron 詩が、その循環する杜撰、感傷 の故に、正しく評価され、時には、その不誠実（真剣性を缺くこと）で 鋭く 攻撃されるとき、一つの性質が たえず のこるのである。

つまり その勢（力）がのこる。ほとんど すべての、Byron についての批評家は、“passion ”、“force ”、“energy” あるいは、“strength” の如き、何れかの用語に頼っている。

さらに —— Swinburne や Arnold がそれをそう呼ぶが —— “Strength” は 詩、そのものによりも むしろ、その中で、それによって、立ち上った者のイメージに、常に帰属する（の特性と考へる）べきものである。

“崇高”と“魂の偉大さ”との同一視（等式、方程式）は —— 即ち 詩風の理論とは切り離し（別に）“崇高さ”の定義を求める傾向と同一視することは —— Boileau によって 近代世界のために 彼の著 “*Reflection sur la poëti tique d’ Aristote* ”（1672）の中で 創始された。

この作品そして、崇高さに関する Boileau の関聯した文献の影響は 英国及び大陸の双方で 深刻だった。彼の考への最重要点は *Le sublime* と *Le style sublime* の間で 彼がおいた区別であった。Boileau においては “崇高さは へだてられ（絶たれ）て そして 思想と その性格が鮮明に提出された情緒の性格の暴露（啓示）の問題となる。“崇高さ”は必ずしも、ある修辞学上の慣行と技術に固執することと結びついている、関係しているのではない。

むしろ Boileau によれば それは 思想の壮大、華麗さか、感情の高貴さか、あるいは、語い（ことば）のすばらしさ か あるいは、その双方の、いっしょになった 調和のとれた結合（marriage）の いずれかに 由来するものである。さらに Longinus と彼の論文（説）を紹介するに当って Boileau は こう言っている。

この作品そのものは 崇高な効果を及ぼし、我々に その著者、Longinus の偉大な考を抱かせる。Samuel Monk は、こう、コメントとしているが —— :

Boileau は “Longinus が崇高について話すとき 彼自身とても 崇高なのである” そして それは 多年 英国で 反響することになるだろう、清潔な語句の転換、Boileau の speculation 思惑 ゆえに、文学における崇高は 詩風よりはむしろ内容の点 即ち、山の陰気さ、或いは、山の輝きといった、取扱はれる対象の崇高さにおいて或いは 対象を提供する思想の崇高さにおいて 益々定義された。この伝統は Byron の伝承である。さらに加えて、Byron は、確かに Longinus の考 —— 即ち、“魂の偉大さ” 気高い思想は 自由という政治的考と、関聯されるものだ —— という Longinus の考に戻ってゆく。

Byron 的崇高さの、これらの相様の どちらも まちがいなく はっきりと彼の最初の 主な政治的成功、Childe Harold : A Romaunt の中で 現れてくる。そこで Byron が 彼の最高の主題である 人間の自由 そして これを確保する ヒロイズムへの願望 (あるいは その喪失) を口に出しているとき Byron の最も昂揚された、そして 情熱的、美辞麗句、修辭的文句が放たれるのである。

Hereditary bondsmen ! Know ye not  
Who would be free themselves must strike the blow ?  
By their right arms the conquest must be wrought !  
Will Gaul or Muscovite redress ye ? no !  
True, they may lay your proud despoilers low,  
But not for you will Freedom's altars flame.  
Shades of the Helots, triumph o'er your for !  
Greece, change they lords, thy state is still the same;  
They glorious day is o'er, but not thine years of shame. (II, 76)

それは これらの詩をかいている人の魂の中に なほ やはり存在している。19世紀の作家達が Byron の “力強さ” と “勢い” について (しばしば やっているんだが) 言及するとき 彼らは この諸の考の合成物 (複雑な、いろいろな考) を求めつつあるのだ。そのような用語は Sthodon Kai enthusias-tikon pathos に対して Longinus の formation (明確な説明) に対する、

或いは、その中の、伝統的、崇高な（考）概念を、ほんやくしている。崇高な詩、そして 特に 叙事詩の詩想は、全く同様の声で 語るだろう。

Childe Harold (I – II) は Helicon 山の霊泉（今はもう かれきったが、かつては、活力に溢れた）への Byron の旅だった。偉大さの失はれた源との接触を再び取戻すことは 彼の試み、企て なのである —— それが今、彼にとって どのように Ghostly 霊的なものであれ。

Byron の自由についての 情熱的な declamation 熱弁 —— 自由という西欧的考のオリジナルな seat（もともとの議席）の衰退の最中になされたのだが —— は読者に向って、崇高なのは、自由思想の力を鼓舞された Byron なのである。

Byron は 生粋のギリシアっ子 “free-born son of Greece” なのである。

そして だが、その国、ギリシアの現代の住人ではない。Byron はギリシアにとって 全くの異国人だが、生粋の、ギリシアを愛する、ギリシアっ子なのである。

この事実は 11, 73 の、一つの manuscript version、生原稿の説明の中で 写實的に、生き生きと、我々に示されている。つまり そこで、Byron は 彼自身の考 —— 自分は近代ギリシアの Mose になるんだ、だから、人間自由の真の源、真隨の redeemei になるんだ という考 —— を明らかにした。a heroic idea 英雄詩的思想という点で Byron は英雄中の真の英雄となるべき運命を背負っていた。

Childe Harold I – II の中で 政治上の高貴について heroism 英雄主義を、かくの如く強調したことは次のことを示すものである。即ち Byron は やはり なほ、自分の“主な、第一の天職”は公的な天職である、だから 詩的経歴 career は、ほんの、一手段にすぎぬものである —— と考えていることを示す。この事実は、名声の年月の間、Byron の他の宣言の中でも亦、確証

されている。

さらに 彼の 1809—13 の詩の中で 英国の政界の無能力を攻撃したにも拘、彼は、いまだに なほ、英国が、自由のギリシア的考の最も主要な継承者であることを疑ってはいなかった。

Byron の、このころの英雄主義的自負は、それ故、彼の英国での、第一の政治的天職と近密に tie up 結びついてた。Byron が、自分が ギリシアの自由の大義において指導者となることを夢見ていたとき 彼は自分は “生粋のブリトン人である” (The Curse of Minerva 126) という事実の中に his sanction 支持、認可 を知った。彼が Childe Harold I — II の 彼の長い散文詩のノートの一つの中で 述べたのであるが、“The Islanders ギリシア島人たちは英国民に救援を期待している” と。

この信念を最もよく例証するものは エルギン卿のギリシアの大理石の英国への積み出しについて Byron の唄った詩の心である。Childe Harold も The Curse もどちらも 英国とスコットランドの間に、鋭い (多少 衛学的 pedantic であっても —— 今日そう思へるが) 一線をかくし 区別している。古代の彫像の強奪 (かき集め) は、現代の “卑しき” ピクト人、エルギン卿の所業なのである：

But who, of all the plunderers of yon face  
On high, where Pallas Linger'd, Loathe to flee  
The Latest relic of her ancient reign, —  
The last, the worst, dull spoiler, who was he?  
Blush, Caledonia, such thy son should be!  
England, I joy no child he was of thine.  
(Childe Harold II, 11)

だが誰が —— かなたの神殿のすべての略奪者の中で、  
その神殿の高所、そこでは女神パラスが  
—— 逃れることを嫌う。

彼女の遠つ昔の御代の最近の歴史から ——

最後の、最悪の、鈍感な、冒瀆者 ——

彼は誰だったのか？

恥よ、カレドニア（スコットランド）

汝の息子は、そのような恥知らず！

英国よ！我は、彼が汝の息子ならざりしをよろこぶ。

Byron は “The Curse” の中で、これと同じ 区別、わけへだて をしている。双方の場合、この考への、うるさく騒ぎ立てることの、うるささ、あくどさ、のみが、英国を、近代世界における自由の考への倉庫、容器として保存したい Byron の 念願を強調している —— すべての英国の愚かしさにも不拘。（見よ、たとへば、English Bards, 991-1010 そして Childe Harold, /, 24-26）

だが Byron は既に、そのような考への実現に心を痛め、悩んでいた。そして、そのことを 我々は Childe Halold II の終りのところで見めるものであるが。

For thee, who thus in too protracted song  
Hast soothed thine idlesse with inglorious lays,  
Soon shall thy voice be lost amid the throng  
Of louder minstrels in these later days ;  
To such resign the strife for fading bays.

(94)

汝にとって —— かくてあまりにも長びいた唄の中で

汝の逸楽と不名誉な状況で 宥めてきた ——

汝の声はやがて最近のより声高の吟遊詩人の群衆の中で 消されるだろう

そのようなものにとって くれなずむ湾への努力はひいてゆくだろう。

これは、この詩での、遅まきながら、出てくる追加的文句であり、それ故に 1811年の帰国の途次、遭遇しなければならなかった哀しい個人的できごとによって かなり影響されている。しかし この文は、亦、興味がある、何故な

ら、それは、その憂鬱感を全くの文学的背景へと移すから。

Byron の初期の作品のように Childe Harold, I — II は いささかも、詩的 —— 叙事詩 又は、それ以外の詩 —— 主張をしない。詩として、Byron のものは、不名誉な物語詞である。そして彼は文学的名声、あるいは経歴、を確立するためでなく 彼の政治的、社会的渴望を確立するために書いている。これが意識的に彼の心を名声の年月を通して占有するだろう職業なのである。

あとで 1814 “The Corsair” への献辞の中で、Byron は公然と、これ以上の、（さらに進んだ）詩的 performance 演出を否認している。“神人” のこれ以上の裁定、又、コラム（新聞の欄）の裁定でもない。 —— を誘わないのが私の気持なのだ。

若い頃、Byron が heroic life と grand poetry との区別をしたが故に、又、自分は前者に適していて —— 目的そして才能によって、後者には適しないと考へたが故に、彼は やや 保守的差別、つまり、文学的諸問題において le sublime と le style sublime との間の、やや、保守的区別を、ややもすれば、認めがちであった。この若き日 くり返して Byron は 自らの詩的才能を過少評価している。たとへば English Bards の中で、彼はこう述べている ——

自分は 自分の時代の悪徳を暴くため自らペンを取った、なぜなら、ある、ほんとうの詩人、 —— たとへば、Gifford のような、 —— が 時代の必要に應じて 人前に 立ち現われてはいないから。

Such is the force of wit! but not belong  
To me the arrows of satiric song;  
The royal vices of our age demand  
A keener weapon and a mightier hand.  
(37-40)

機知の力にかく素晴らしい！が諷刺の唄の  
征矢を放つ事を、持ち合はせぬ；



我々の時代の王室の悪徳は要求する  
より鋭い武器と、より力強い手を

(37-40)

ぬきんでていた詩的技術を全く要求せず、自らの生涯において “Moralist” として考へられる権利をがちとらなかつたけれども Byron は道徳性への “Zeal” (993) 及び 彼の祖国の名誉への “Zeal” (熱意) を、しかし、公言している、この熱意はきっぱりと 申し述べている。

English Bards そして Childe Harold は 真実と正義を激しく求めている。もっとも、それらは personal techne 及び 人生のみならず art の実践において 哀しい欠陥 defecency を認めているが。

本来、Byron は Boileau の le sublime と le style sublime の間の区別、識別 distinction を例証している。高貴なものへの強い愛着故に、Byron はなお、さらに 彼の “slylislic” 弱さ —— 文学的 且つ個人的双方の —— を知る。彼は亦、次の如く主張する —— 自分は文学的諸問題の中の Le Style sublime への リアルな aspiration 渴望は少しも もたぬ —— と。自分は、自分の勇ましい考へを生きること、行動をもって生きぬくことを望む。

その双方の点で それから —— Byron は Boileau の区別 distinction に従うけれども、はっきりと、示している、即ち —— Literary sublimity は彼自身の心の中で、Le style sublime がなければ不可能であり、あり得ない —— ということ。

passion, force, vis (L=force) —— 必要要件だが —— それだけで 充分なのである。

Byron の態度は明らかに、Hints from Horace —— Horace’s Arts Poetica の彼の翻訳 —— の中に述べられている。English Bards の中での his

Juvenalian displays ユーエナーリス (ローマの詩人) 的表明の後、Byron はここで sermo merus-style の彼の Horatian model ホレーショの典型へと変調している。この翻訳は Horace (そして Boileau) に従ひ、vis (=farce) の重要性を主張している。詩における立派な style (詩風) は 必要である ——

この点は 芸術での主要な、第一の課題である —— だが、しかし この style だけでは充分でない。

'Tis not enough, ye bards, with all your art,  
To polish poems; they must touch the heart ;  
Where'er the scene be laid, where'er the song,  
Still let it bear the hearer's soul along.  
(137-40)

汝詩人らよ、君らのすべての技術にも不拘、充分ではないのだが、  
つまり詩に磨きをかけることが。詩人らは心に触れなければならぬ。  
その場面が、どこへ置かれようと、唄が 何処で唄はれようと  
やはりそれは 聴き手の魂を運ばしめよ。

しかし The Haration sivismefrere を固守して Byron も亦 arts の care 配慮を主張する。

Unless your care's exact, your judgment nice,  
The flight from folly leads but into vice ;  
None are complete, all wanting in some part,  
Like certain tailors, Limited in art.  
(49-52)

君の配慮が正確で 君の判断が素晴らしくなければ  
愚行からの逃避は 悪徳へと導くのみだ。  
完全なるものは何一つない、すべてが 或る部分で缺けている  
あるティラーの様に、術に 限りある

(Horace ホラティウス。ローマの詩人)

Horace の如く Byron は “The Hints” の中で the laurels of a true poet (真の詩人の栄誉) を要求していない。そのようなものは poetic art 詩道の偉大なる models のために Byron は これを取っておくのだった。即ち Homer の為に、Horace の詩の中で。Milton と Homer の為に Byron 詩の中で。

Horace の如く, Byron は 注意深く、自分の詩を the Hints の中での自分の詩を、sermo style のより lower 低調な key に適応させようとしている。

Byron は 彼の解釈を とても誇りに思ったのは この詩が そのモデルにとても忠実であると感じたから。後で 批評家たちは 概して 彼の努力に失望した、そして、たとへば English Bards の方が 遥かに より良い、すぐれた作品だと判断した。しかし “The Hints” の中で Byron は 故意に、Juvenal ユーエナリス (ローマの詩人) の tone から それることを ねらっている。Byron の この試みは —— Byron はまちがっていない と感じたのだが —— 慎しやか、けんきょに考えるとき —— 真の成功が ないでもないのである。ほんとうに、modestyこそ —— Byron の観点からすれば ——

詩のテーマ、そのものなのである、というのは、Byron は 詩的要求 (主張) は いささかもせず、只単に、ひたすら、真なるものと、偽りなるものとの相違を区別すること、特に崇高なるもの、 —— 真の崇高と 偽はれる崇高との間のちがいを支持することを望んだ。もし、彼が この区別をはっきりすることができれば Byron はみずからを 多くの人々と切り離し、自らを man of judgementであることを示すのである。Horace poet への忠告は次のようである。

Sumite materiam vestris, qui scribitis, aequam  
Viribus, et versate diu quid ferre recusent,  
Quid valeant humeri; cui lecta potenter erit res,  
Nec facundia deseret hunc nec lucidus ordo.  
(38-41)

この詩そのものが 核心点を例証している。Byron が この text のところ

まで 読み来ったとき、たどり着いたとき、彼は Horace から 次の如き hint を得た。

Dear authors! suit your topics to your strength,  
And ponder well your subject and its length ;  
Nor lift your load, before you're quite aware  
What weight your shoulders will, or will not, bear.  
(59—62)

親愛なる作家諸兄！君の話題を君の力強さに合はせなさい  
そして熟考するんだ、君の主題とその長さを、  
そして君の荷をもち上げないことだね、  
君の両肩にどんな重荷をかつぐか、かつがないかが、わかるまではね。

Slyle 詩風が modest 謙虚であるだけでなく —— この点でも いや 全てを通して —— poetic form 詩型のうちで 最もよりすぐられたものは、よりぬき、はえぬき、生粋なるものは modesty の完成 perfection、極致なのである。即ち poetic paraphrase 詩的言い換え すなはち Byron のことばをかりれば、“an allusion in English verse to the Epistle, Ad Pisones ” である。English Bards の中で Byron は 目立つ、激しい、口調を用いているが、彼の続篇の中で 彼は そのような假定から 後退している。Juvenal ユーエナリスは English Bards の中では Byron の model なのである、だが Byron は “the Hints” の中では、Horace を代弁している。現に この詩の中で、そうしているように、自らは 人目にたたぬようにすることによって、Byron は我々に向って —— Don Juan のことばをかりれば —— 自分は “a deal of judgement” (1, 205) を身につけた と 語りかけている。

## II

Hints の 2 つの proofs 校正刷り がぬき出されて Byron は どちらも校正し 彼は English Bards の 五版と共にこの詩を 発行することを計畫

した。その計画は しかし dropped されたのは、他でもない、大いに ——  
彼が英国へ帰ってきたとき —— Byron が、彼の最初の 諷刺詩の中で ——  
— More や Lord Holland のように —— 攻撃した幾人かの人々と親しく交友  
を取り戻したからなのである。

Byron の文学的生涯の利点、有利な立場から この出版中止の決意には 大  
した相違はなかったのである。Childe Harold の成功にひき続き すぐその後  
で Byron は 上院で 処女演説をぶった。が、とても、これは うけた。Byron  
は自分がこれで有名になったことを知り すみやかに whig 党の社交会の中へ  
と のめり込んでいった。

Byron の公的生活は一時、Byron の文学的活動を裏面へと押しやったが、ひょつ  
と、そうなりゆくのではないかと予期した風にはなり行くことはなかった。彼  
は high-minded な “第一義的 最も主要な職業、天職” にすばやく巻き込ま  
れたのでなく 愛情のからみ、もつれ そして Regency (摂政政治) high  
life の だらしない世界へと巻き込まれていった。

彼の childe Harold の出版、そして 処女演説の一年後 Byron の幻滅は  
はや公然と現れ始めた。1813、3月に 彼は姉 Augusta に手紙をかいた。

僕の議会の schemes 図式は 僕の 好みに合はない —— この前の会期中  
に二度も そう言った。そして それは、それで 充分だ と言はれた。だが  
このことを 全面的に きらい、憎む、だから この舞台 stage (政界) で  
さらに時を、いばって、そり返って歩く積りは 毛頭持たない。

僕は今、人生の盛り、青春 をかくの如く 浪費しつつある。そして 日々  
それを悔みつつある、しかも、決して修正しようともしないでいる。

Byron の政治計画への失望感 は 彼自身の衝動及び周囲のものの態度を、  
考へるにつれ 益々深まっていった。1813、11月の日誌に 意中を打ち明けた。

日々 向上できぬ者は何人も rhmer になるべきでない。そして それ故に人は悩み わずらうのだ —— スコット やムーアや Cambell や Rodgers を見て —— 彼らはすべて agents 差配人 となっても、よかりそうなものだったのに 今、単なる見物人、傍観者にすぎぬからね。この国で私が目につける何かがあるなら それは議会的なものだろう、たぶん。だが私には、野心は少しもない。少くとも —— もしあれば —— それは Aut Caesar aut nihil だろう。私の希望は 私の身の事情、雑事を整理すること、そしてイタリアか 東洋で解決することなんだが、そして その双方の言語と文学を深く吸収することに限られている。過去の詩の出来事は私の気力を失はせていない。そして私に今、出来ることは、只、生活をたのしいものにすること、そして、他人が、遊んでいる間 それを眺めることなのだ。

特別 彼を怒らせたことは 彼の自己顯示だった、つまり、 —— 自分は、“真の生まれながらの愛国者” としての自ら公言した Calling に自らの無頓着、無関心に、大いに責任があるという、自己顯示に。

Lady Melbourne に対し 1813, 9, 21 に次の如く 述べている。

Bugden (sic) で 私はある僧上に偶然あった。この僧上が私に the Government のことを思い出させた —— the Government of the Governed ——

そして the Governed of their indifference towards their governors, そしてそれを あなたは すべての parties で気づかれたにちがいないが。

これらの反省は 次の如く吐き出されていた。

'Tis said Indifference marks the present time,  
Then hear the reason-though 'tis told in rhyme-  
A king who can't, a Prince of Wales who don't,  
Patriarchs who sha'n't, and Ministers who won't,  
What matters who are in or out of place,  
The Mad, the Bad, the Useless, or the Base?<sup>14</sup>

無視は '今' をマークすると いわれる

それから理由をきけ —— 尤もそれはリズムで 語られるが ——  
できない王、しないウェルズ王子  
することはない愛国者たち、しないだろう大臣たち  
誰が適所に、いや不適であろうと問題ではない  
狂者、悪者、役立たず、いや、卑しい奴？

このようなコメント、散文、詩で、1813—15年の間、Byron から 吐き出されたのである。事実彼の未発行の詩の最大の body はこの期間に始まる、そして その多くが、大部分が、これらの主題を取扱っている。

Byron は 1810年以来 真剣な詩的計畫を試みたことはなかった。1812年の秋 彼は waltz を書いた —— それは 彼が活動している快樂を愛するサークルと同じくらい彼自身についての諷刺詩である —— 同じ頃、彼は亦 最初の物語り詩である “the Giaour” の仕事を始めた。

この particular な 詩生活への復歸に當って我々は Byron の思想が 英国民及び（双方の意味で）for himself（彼自身のため）そこで形造りつつあった生活から、それゆきつつあるのを見る。

12月迄には 彼はこの詩の作製に 大いに巻き込まれ、没頭した。そして同時に 彼は、よりロマンティックな場所への旅を計畫し始めていた。この計畫が1813年の間、ずっと これからの計畫が彼の心を占領した。“私の好きなものはすべて 今や 消え失せた。” 彼は メルボルン婦人に 打明けた。

“だから私が嫌うものは すべて、多少の例外はあるとしても、残っている。即ち、摂政王制度、彼の政治、そして 多くの彼の臣民。なんて私は愚かだったことか、戻って来るなんて！ 次回は 私は もっと賢くなるだろう、もし すべての全組織に改変の見込みがないのであれば”

Byron の政治的野望の崩壊と共に、彼は詩へと帰っていった。そして そ

こで環境のつまづきの故に駄目にされた英雄的理想の領域を開拓することができた。そのときでさへ 英国は これらの理想を失いつつあると Byron は考えた。そして一方 ギリシアが只 その理想を支えてくれた。だがしかし —— そして このことはByronにとって 最も耐えられぬ こと insupportable fact であったかも知れぬが —— 環境、背景が同じく、金を求め、快楽を愛する Longinian の罪より だらくしつつあった社会の中で、英雄的価値を維持するに足る唯一肝要な人々をも スポイルしつつあった。そのような背景の中で 英雄その人が 破壊的力となった。即ち 必然的に だらくした社会と共に、戦争に向って必然的に駆り立てられて、その故に、彼は 反英雄的と考へられた、というのは 英雄的だったけれども、彼の存在が 彼が支持されるはずだった社会的価値から そらして その意味そのものを自分の方へ ひきつけてしまったから。

おそらく Byron 作品中のいかなる詩句も、より生き生きと、（この ‘さぐり’、‘投機’ についての the Giaour の中の あの有名な詩行より以上に）Byron 的 ヒーローの自殺的 あいまいさ を暴露することは あり得ないだろう。

“The sting she nourish’d for her foes” は彼女自身に turn back される。心理学的に考えて このイメージは、やはり、彼らの自然の outlet（はけ口）の ぎせつした情熱の、自らを破壊する運命を描いている。“Corsair” の如く、“the Giaour” は国をもたざる英雄であり —— すべての、それを取巻く社会の敵であり そして 結果として、自らへの敵なのである。

### III

“the Giaour” は epic poetry の伝統 及び —— そのような詩が Characteristically（特有に、独特に）に 激賞しようとする —— heroic ideals（英雄的思想）の双方を 呼び戻す詩である。

詩の中で 詩の背景が <sup>ヒーローの生活</sup> heroic life の固有の機能を毒してきた。そして



これら理想の debasement (低下、だらく) が詩の形式的断章と (match) マッチしているのは あたかも 英雄詩的物語の詩行が 同様な詩的 warp (ゆがみ、そり) を受けねばならぬかのようなものである。

The corpse of Greece のイメージは —— 最初に 手がけられて —— 詩の領域の heroic virtues の正しい機能の不可能であることを説明するに過ぎない。

“いつ The mistocles の如き ヒーローが 再び この世に現れるか？” はこの詩の冒頭での問いかけなのだが、その答へは、永久に きかれないう。

Byron の tales (物語り) の後の部分はひきつづき、in extremis の中でヒーローの理想を検討する。これらの作品の多くはエピソード的なものであるが、the Corsair と、その続編の Lala は より広大な社会的背景及び より Coherent (密着) な plot line —— Conrad, Lala の冒険に対して —— を発展させようと試みる。Byron の初期の物語りのすべてが Byron にとって Age of Bronze と思われたもの、中で heroism と heroic narrative の問題的背景を分析している。

しかし the Corsair や Lala のところではじめて Byron は 我々に与えている —— Karl Clober の言葉をかりれば —— “M. Escarpit the portrait intorieur, 即ち 主人公 (主役) の複雑な正確についての ‘歴史的’ 分析と呼ぶものの最初のお手本を。

Lala について 特に Crober は適切な評言をしている。遂に私が彼を引用するのは —— 私は多くの論評に同意する一方、さらに もっと一歩進んだ distinction (区別) が必要だと 考へるからである。

この詩は The Corsair の続編といってよい、というのは Lala は Conrad

で、彼の謎めいた小姓の Kaled は Gulmare が変装しているのだから。しかし Lala では Byron はスペインを示す、漠然とした 中世的背景としてのエーゲ海の風景を放棄している。Byron 自ら述べている。“その名前だけは スペイン語である。その国は スペインでなく Moon である” と。時と現場のあいまいさは 強力な物語り詩であつたろうものを弱めている。Lala の性格と行動の両方が —— 彼が巻き込まれる ——

センセイショナルだが —— ‘現実感’ をもつ。Lala は 人類から追放された者、Satan、一人の Cain、あるいは Conrad よりもむしろ特別の社会の segment (一部分) よりの追放者である。彼は 誇り高い、傲慢な貴族領主のグループの中でも 最も誇り高い、傲慢な人間で、その敵意は 彼をかりたて、人気ある自由の側を支配するが不成功に終る。Lala の個人的喧嘩 及び 彼の個人的に彼の貴族たちと相容れぬことが、彼の社会の中で混乱の兆しとして扱はれている。しかし Byron の不幸な —— その社会を 永遠の (時のない)、場所のないものとしようとする —— 決断が個人的 社会的 この相互浸透を、事実、無意味なものとしている。だが、やはり、彼のメロドラマチックな主役を ある種の社会関係の網の間に位置づけさせることによって Byron は Don Juan への長足の第一歩を踏みこんでいったのである。

Lala は The Corsair の “主役の如きもの” 以上なのである という事実は、重要で意義深い。Byron は読者に向って —— Lala は The Corsair の続編と見なさるべきだ —— と述べたが、この両者の詩の関係は意義深い。

Peter Thorsler が述べているが —— “最初のロマンスの the Corsair は 愛人の死という哀しみに打ちひしがれ、第2の物語りでは 彼の祖先の地へと帰ってゆく。” 我々が この Lala の狂った状況を観察するとき それなら何故に 彼が先ず それを置き去りにして 且つ 何故に 彼が一人の貴族の無法者としての生涯をとりあげたのかについて 明白な証明、解明を与へられてゆくのである。

さらに kroeber が、時と現場の、あいまいさが、Lala を勢のない、弱いものとしていると述べたとき、この物語りでの Byron の目的を あいまいにしている。Lala は実に、メロドラマティックなプロットと反対感情並列 ——

公言されたスペイン的現場への —— によって 損われ、無力にされている。だが この詩の目的はこの弱さの中で明らかにされている。主人公の名、Lala は ヒロイックな スペイン詩のある cycle 循環から取上げられている。Byron 詩は これらの伝統を思い出させるが、結局、その、だらく、低下を示している。The Corsair の中で Lala の名前、Conrad は、Byron が Sismondi の中で読んだものの中から とりあげられたものであり、それは 13 世紀の間、イタリアの諸共和国の中で 荒れた、ものすごい 社会的衝突を想起させる意図である。Ezzelin —— Lala の敵手であるが —— は Simondi の歴史から ひき出された、別名である。彼の野蛮性と邪悪さは 事実 とても顕著なので、彼の名は 悪魔そのものを連想させるようになった。対照によって Conrad は古代の伝統の擁護者であり、Guelph の敵 —— (“Guelph” は Troy の Byron 的 code 暗号である。) そして 彼の名前は “wise あるいは、brave な 勸告者” を意味した。

詩の問題を さらに 複雑にしたとすれば Byron は Lala という名を Ossian のヒロイックな伝統と連想させたであらう —— そして これに Byron は 若き頃とても惹きつけられたのだが。この名前は Macpherson の中で Fingal と Ossian と戦った戦士の一人として 現れている。

最後に —— Thorsley が指摘しているが —— Conrad, Lala の物語は Byron によって Jean Lafitte と Blackbourne, York の大僧上 (1658-1743) の生涯を連想させているが —— そして 彼は帰ってきた、改心した海賊 (17 世紀 アメリカ大陸のスペイン領沿岸を荒らした) だったと噂された。これらの人々の生涯は

the Giaour の中の、無名の英雄の物語に すべて似ていた。彼の最終的ノートの中で Byron はこう述べた ——

この物語は “ずっと昔の若きヴェニス人について話されたものである” と。

この物語は また 明かに Byron の挫折物語 “Il Diavolo Innamorato” —— 彼の新しい断片のみならず —— の基盤として語られたものである。

この、いちじるしい諸影響のもつれの、からみ合った連結も亦 Byron の若き頃のバラッド “Osca of Alra” を含んでいるが これは Schiller の Der Geisterseher の影響をうけている。後者を Byron は “Il Diavolo lunamorate” \* の model として認めた。

- \* “Byron’s First Tale: An unpublished Fragment.” KSMB 19 (1968) :  
Byron’s manuscript reference to  
“The Armenian” is an allusion to  
Der Geisterseher, which was first  
translated into English as The Armenian;  
or, The Ghost-seen.  
See Also Byron’s note to “Oscar of Alva”

これらの ほのめかしと影響力 を心に 銘記しておくことの肝要な点は  
それが —— 何故、Byron が Lala について 述べたことが、つまり、“名前  
のみが スペイン語で、その国はスペインでなく the Moon であると言った  
のは 正しかったか —— を説明するから。

Byron が —— それは、彼の想像の国、Byron 的 hero の国だったと ——  
言ったのは もっともだったかもしれない。Kroeber は言っている ——  
Lala は “人類からの追放者”、(サタン、Cain, そして Conrad のように) で  
はなくて、“特別の社会の一部からの追放者である” と。

しかし これは 半ば真実であるに過ぎぬ、というのは Lala は Byron 的  
主人公が卷込む、普遍的物語りのスペイン的 手本であるように意図されてい  
る。そして しかも その物語は それが Lala や Alva の Oscar に向けられ

ているのと同じく Cain や Conrad に向けられたものであるから。

Lalaの問題点は これで Byron は 自意識的に 関連のない歴史的個人の  
全集団の普通性（一般性）を強調しようとしたことである。

この詩は そのようなヒーローの不気味な塊りを多くの異れる源から集めて  
そして さらに Byron 自身の そうような人物を用いたことの 一種の要約  
を試みてさへしている。 コルセアとララは heroism の西欧的理想の、だら  
くについての、不器用な、形而上学的処置を形造っている。そして いっしょ  
に それらは Childe I—II で述べられた物語と同様のものとして のべ  
ている。そして ギリシアへの逃避行 —— heroic ideal が腐敗している社  
会から —— のあの発見 —— heroism があの古代の場所で とり戻せなかつ  
たという —— そして祖国の地への帰郷 —— heroic な幻想 を取り除かれ  
かつ 社会との最終的衝突へと、いはば 致命的に進んでいった。

Byron の初期の物語は 論評であり —— それは 彼自身の心理と個人的  
生活、即ち 我々が しばしば それらを読む やり方についてのもののみならず、彼の政治についてのもののなのである。

“人間は ある限界以上には 絶対に 進歩しない。” 1813年 日記に  
陰鬱な気分でのべた “そして ここで 後退しつつある —— あのどんよ  
りした、愚かな、古き、組織に向かって それが 異った風でありさへすれば  
—— 。”

To be the first man—not the Dictator—not the Sylla, but the  
Washington or the Aristides—the leader in talent and truth—is  
next to Divinity! … [But] I shall never be any thing, or rather  
always be nothing. The most I can hope is, that some will say,  
“He might, perhaps, if he would.”<sup>28</sup>

—— 流人たること —— 独裁者でなく —— Sylla でなく ——

Washington か Aristides —— 才能あり真実の指導者としての、それは神聖に近づくものだ。しかし 私は 何者にもならぬつもりだ、いや、むしろ、つねに nothing 無 でありたい。私の希める最大のことは 誰かが云うだろうこと “彼は（一流人たることを）希めばたぶん なれるだろう”

だがしかし “霊的でない神” —— 本質的にも、彼の社会でも —— はそれを妨害した。それ故 Byron は heroic 英雄的、政治的目的からそれて詩へと帰り、そこで 彼が直面している問題を分析しようと試みて、彼も亦、act of poetry 詩の行為そのものに於て those elusive 逃避的 価値を恢復、とり戻すことを試みた。しかし 一時、彼の文学生涯についての 彼の意見は好ましいものではなかったから、その企てはスタートから弱まっていった。1814年に さらに 今までかいて来つつあったものについて ふり返ったとき、その作品の純粋に詩的性格に肝をつぶした。彼は Moore に向って 次のように書いた ——

僕のかいたものが 妙に過大評価されていると最近考へ始めた。そして兎に角……それらを永久に お払い箱にしてしまった。僕は君に 僕が凡ての者には話したくないこと、最近の二作は —— “The Bride” は四日で、“The Corsair” は10日で 書かれたことを君に云へるよ。そしてこのことを僕はとても、恥ずかしい告白だと考へている、なぜなら、このことは 僕自身の（出版にあたり）判断力の缺如であり 亦 読む立場において 公衆の判断力の缺如を実証するものなのだから。

一ヶ月後 Byron は 再び Moore に手紙をかいて 今回は 前に 政治的経歴についてのべたと全く同じ “might have been” の文句を詩的経歴について はっきりと 述べていた。

僕にとって —— いや、むしろ、私から —— もう不要なのだ。僕は stage 舞台から暇をもらった。そして 以後、もう ペテンはやらぬ。そして 一つの目的がある。僕が期待する、いや、むしろ、さらに、渴望する至上

のものは Biographia Britannica (sic) で —— 僕がもし、had gone on (詩人の道を續けて歩み amended 軌道修正をしていたら おそらく 詩人になっていただろうに —— と言はれることなのだ。

若き日、自作へのByron の判断は多くの文学的歴史家同様 あらっぽいものだが、ほぼ、正しい。彼が云はないままでいる事、その行間に読みとらねばならぬことは、偉大さへの衰へぬ愛着である。 —— にも不拘、文学的にせよ、政治的にせよ、偉大な人々の間での、ある地位へのタイトルを確立するべく彼自身は無能力なるにも不拘 —— この点で 彼の失敗、挫折は 一つには、彼のわかれた狙い 目的の結果である。彼は詩人たることを望まなかったし、少なくとも 詩人たることを望むべきではないと思った。だがしかし 彼も亦 双方の考慮で 望んだのである。

彼は 自らに向って云った Aut Caesar aut nihil と。かくして impasse (行きどまり、袋小路) と虚無主義を保証し うけあった。詩だけが のこるように思へた、しかもこれが 当然そうあるのが 心を痛めた。 というのは 詩は 行動の人生、生涯の次に位するなにもものでもなかったから。たとへそれが something であったとしても、彼は その仕事に不適であった。彼は両面からの 挫折を感じた。

同時に 初期の heroic tales に関する彼の作品が彼を —— ロマン主義作家がうけ入れた英国叙事詩の伝統との最初の真剣な接触へと —— 引込んだ。“Hints” の中で Byron は とても伝統的道をたどった、その理由は古典的腹話術者として、出しゃばった という理由からだけでなく、この詩を通して彼が Milton を詩的手本として —— Horace ホラティウスが Homer ホメロスと名ざしされるところではどこでも —— 頼ったからなのである。この場合、Byron は18世紀の英国の詩的理論家の dominant 支配的慣行に従ひつつあった。

Byron が Hints の中で Milton の詩風を用いたことは しかし 純粹さに反身的ゼスチュアであるように思へる、というのは、Byron は明らかに Milton の叙事詩の venture 冒険の性格に対して なんらの注意深い配慮をしていなかったし 又 “失樂園” が何故、heroic poetry 英雄詩（叙事詩）及び the heroic の概念に対し、そのような革命的態度をあらわしたか の理由に対しても、いささかも考慮していなかったから。

他方 Byron は 初期の作品を創るにあたり、heroic ideal の意味を開拓するために Milton を使った。この分析は 詩という点で もっぱら 行はれたものだが、その分析の主題は はっきりと 政治的なものであり かつ、暗黙のうちに 個人的なものであった。

しかし これらの作品の主題は決して詩的なものではなかった、それ故、我々は Byron が Milton を使用したことを たとへば Wordsworth や Keats がこれを使用したのと、はっきり、区別しなければならぬ。“Hyperion” や “The Fall of Hyperion” は詩道に関する詩である、だが、しかし、これは Byron の詩物語の、いずれの場合とも事情を異にする。それにも不拘、これらの作品を創ったということは大いに Byron の将来の詩にとって意義あることを 実証することになった。

— 続、次号 —

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford : Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Haytley Coleridge : The Poetical Works of Lord Byron : Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand : Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty : Byron.
- 5) John, D. Jump : Byron, Rontledge and Keygan Paul.